

中高生における自転車利用の意識実態

福井工業大学大学院 学生員 ○吉村 朋矩
福井工業大学 正会員 和田 章仁

1. はじめに

自転車は、気軽に乗れて大変便利な乗り物であり、通勤・通学・買い物などに多くの人が利用している。しかし、その自転車が起こす事故が増加している。また2008年6月に施行された道路交通法の改正に伴い自転車に乗車する際の罰則なども明確に示された。このため、正しい交通ルール・マナー及び自転車の乗車方法を習得し交通事故防止を図る必要がある。

本研究では、福井市内の中高生を対象にアンケート調査を実施した。これにより、日常の自転車利用、交通ルールの認識や意識、事故経験などを把握する。そして学年の違いによる自転車利用の意識や事故経験・交通ルールの認識の違いから自転車利用の意識を分析、さらには今後の自転車利用に対する安全教育の在り方の検討につながると考える。

2. 調査概要

調査は、福井工業大学附属福井中学校及び福井高等学校の生徒を対象に実施した。調査方法としては、各校においてホームルームなどの時間を利用し、アンケート調査票を配布し、その場で速やかに回収した。905票配布し、877票回収した。そのうち有効回収数は、874票（有効回収率：99.66%）であった。

アンケートの内容は、個人属性、事故・接触経験、交通ルールについてなどである。

3. 調査結果

（1）回答者の年齢別構成

性別及び学年別に示したのが、表－1である。全体を通して、男性の割合が多いことが分かる。各学年の男性と女性の割合はほぼ同率を示している。また回答者の人数は、学校の規模から中学生と高校生で差が出た結果となった。

（2）登下校時における自転車利用について

図－1に示すように、自転車で通学している生徒は全学年において過半数を占めているが、中学1年

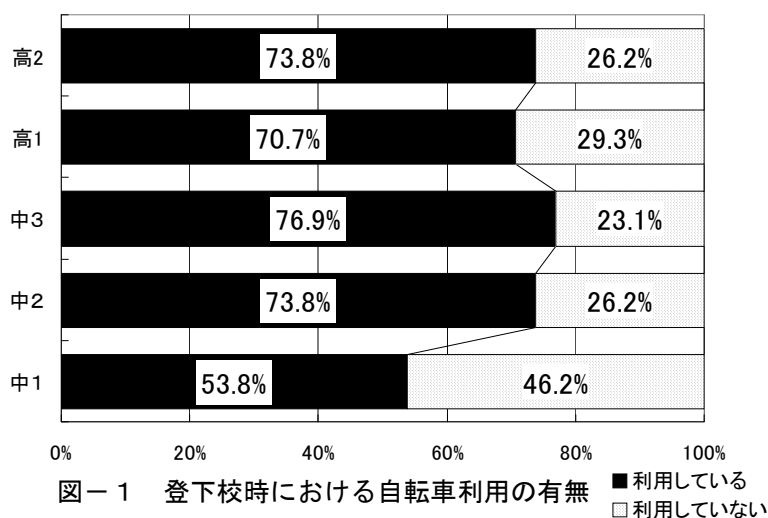
生においては他学年に比べ低い割合を示した。中学2年生以上の学年は、自転車で利用している生徒が多いということが分かる。

通学時間について表－2より、全体の平均時間は22分である。また最短時間は中学1年生の1分、最長時間は高校2年生の70分である。このうち1分というのは、中学生が短い時間を感じたに示したものだと思われる。

表－1 回答者の性別・学年

	男性		女性	
中学1年生	28	71.8%	11	28.2%
中学2年生	27	64.3%	15	35.7%
中学3年生	24	61.5%	15	38.5%
高校1年生	253	65.4%	134	34.6%
高校2年生	255	69.7%	111	30.3%
合計	587	67.2%	286	32.8%

(注) 不明を除いて集計



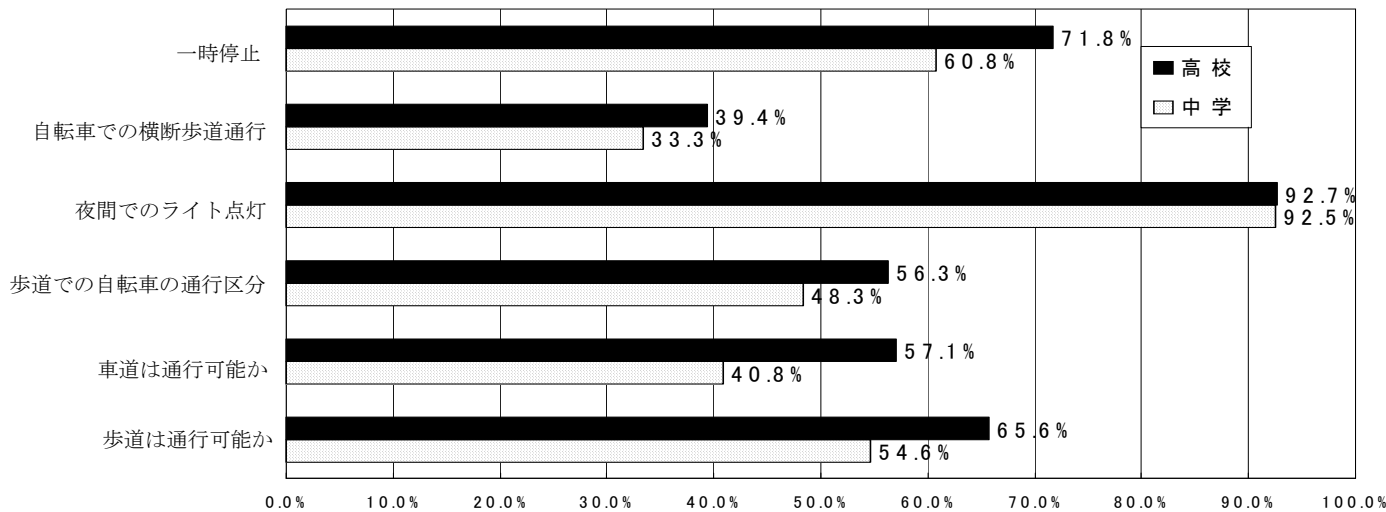
図－1 登下校時における自転車利用の有無 ■ 利用している □ 利用していない

表－2 学年別の通学時間

	最短時間(分)	最長時間(分)	平均時間(分)
中1	1	50	22
中2	4	60	22
中3	5	50	25
高1	2	60	22
高2	2	70	23
全体	1	70	22

キーワード 自転車, 安全教育, 交通ルール, 中学・高校生

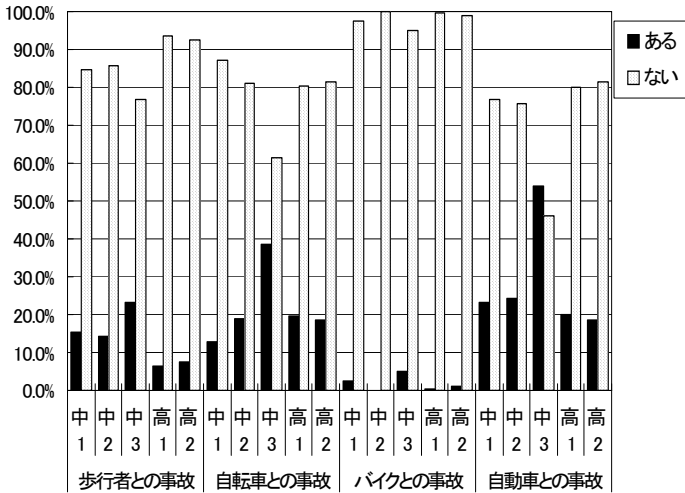
連絡先 〒910-8505 福井市学園3丁目6-1 福井工業大学土木環境工学科和田研究室内 TEL: 0776-29-2585



図－２ 交通ルールの正答率の中高比較

表－３ 学年別の接触・事故経験

	歩行者との事故					自転車との事故					バイクとの事故					自動車との事故				
	中1	中2	中3	高1	高2	中1	中2	中3	高1	高2	中1	中2	中3	高1	高2	中1	中2	中3	高1	高2
ある	15.4%	14.3%	23.1%	6.5%	7.4%	12.8%	19.0%	38.5%	19.7%	18.5%	2.6%	0.0%	5.1%	0.3%	1.1%	23.1%	24.4%	53.8%	19.8%	18.6%
ない	84.6%	85.7%	76.9%	93.5%	92.6%	87.2%	81.0%	61.5%	80.3%	81.5%	97.4%	100.0%	94.9%	99.7%	98.9%	76.9%	75.6%	46.2%	80.2%	81.4%



図－３ 学年別の事故・接触経験

(3) 交通ルールの認識について

中学・高校別において交通ルールの正答率を示したのが、図－２である。夜間、自転車に乗車する際にライトを点灯させなければならない項目の割合は、各校ともに高く、共通認識があるように思える。しかし横断歩道を自転車で走行してはならないのだが、この認識が各校とも低い割合を示している。また自転車は軽車両に指定されているので、車道を走行しなければならないがこの認識も低い。これより、自転車が軽車両であるという認識が低いように思える。しかし一方で、一時停止をしなければならない認識は双方とも高い割合を示している。

(4) 自転車での接触・事故経験について

各学年における自転車での接触・事故経験について

て示したものが、表－３及び図－３である。これから注目したいことは、どの学年もバイクとの接触・事故をしている割合が極めて低いものの、中学３年生の接触・事故が他学年に比べ、どの項目も高い割合を示している。さらに、自転車同士の事故及び自転車と自動車との事故が高い割合を示している。この理由としては、自転車が走行する空間が不十分であるか、両者の交通ルールの意識が低いため事故が起こっているのではないかと考えられる。

4. まとめ
- 本研究では、福井市内の学校に通学している中高生の自転車利用における交通ルールの認識及び意識を調査することにより、次のような知見を得ることができた。
- 1) 自転車で通学している生徒が全学年で過半数を占めている。
 - 2) 夜間ライトを点灯させなければならないことは、共通認識がされている。
 - 3) 自転車が軽車両である認識が低い
 - 4) 接触・事故経験は中学３年生が、高い割合を示している。また全体としては自転車と自転車、自転車と自動車との接触・事故が高い割合を示している。
- 今後の課題としては、大都市の中高生における自転車利用意識を把握し、自転車利用における安全教育の実施基準及び方法を提案したい。